
ポケットモンスター S P E C I A L

月草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターSPECIAL

【Nコード】

N0167P

【作者名】

月草

【あらすじ】

ポケモンリーグを目指すなら、モンスターボールを手にとろう。草むらへ繰り出したとき、出会ったポケモンを、パートナーにできるだろう。……もちろん、上手くいけばだけど。

大人気コミックス、ポケットモンスターSPECIALを、できるだけ忠実にノベライズ化！ レッドたち図鑑所有者たちといつしよに、カントー地方へ旅立とう！

第一話 vs ミュウ（前書き）

大好きなマンガ、ポケスペことポケットモンスター SPECIA
Lを、若干のオリジナル要素を加えて小説化しました。つたない作
品ですが、楽しんでいただければ幸いです。

オリジナル要素として、レッドの父親が重要な役になったり、
にじファン作品中の主人公を勝手に（いいのかな）登場させていた
だいたりしています。

今回は大人気作品「悪の道奮闘記」の主人公、サイカ氏に登場し
ていただきました。うめぼし先生、ごめんなさい！

第一話 vs ミュウ

1. ポケモントレーナー、レッド

カントー地方のかたすみ、マサラタウンという町がある。工業開発が進むカントー地方にあつて、昔ながらの自然をのこす、たった一つの町だ。この町の郊外へ目をやると、花や木、草や虫、ポケモンやポケモントレーナーたちの、活きいきした姿に会つだろう。

晴れた空の下、今日もマサラタウンの草むらで、ポケモンとポケモントレーナーが火花を散らしている。背の小さい、ポニーテールの女の子が、『ニドリーノ』と向きあっている。ニドリーノはこの辺りによくいるポケモンで、なかなか力が強い。この子が目をつけたのも、それが理由だった。

ニドリーノはこういった姿をしている。トリケラトプスを思い浮かべてほしい。その子を小さくして、角をはずして短くし、眉間にくつつける。それから耳をかわいく、ウサギのように変えたあと、白ペンキで体中を塗りたいく、ところどころを紫のギザギザまただらでかざりつけ、遠目にみたならできあがり。かわいらしくて目の鋭い、トリケラトプスのミニチュアが、まさにニドリーノだ。

ミニチュアとはいえ、迫力はある。いまも女の子をにらみつけ、「食べちゃうぞ」といわんばかりだ。

「みつけたわよ！」

女の子が言った。ポケットからボールのようなものを取り出す。それは上半分が赤、下半分が白、真ん中を黒い線が通り、中心にスッチがある、派手なデザインである。これはポケモンをつかまえるアイテム、『モンスターボール』だ。

「あなたはわたしのポケモンになるの！」

モンスターボールを振りかぶり、ニドリーノめがけて投げる。ポ

ールは宙を飛んでいき、ニドリーノの顔に当たった。

「やった！」

しかし、なにも起こらない。ニドリーノはクッククックと、鼻で笑っている。「どうした、もうおわりか？」と言いたげだ。

「あれゝ。なんで、なんでえ！？」

そのとき、後ろから声がした。元気な男の子特有の、よく通る声だ。

「はっはっは！ それじゃだめさ」

女の子は声のほうを向いた。そこには、赤い帽子に赤いジャケツト、赤いスニーカーをはいた、男の子が立っていた。帽子のしたからクセのある髪がはみだし、まっすぐな目をしている。

「ポケモンゲットはこうやるんだ」

男の子が言った。ベルトからモンスターボールを取り出し、地面に投げると、光が飛び出した。それは徐々に消えていき、中から「手足のはえたオタマジャクシ」ともいうべき、おなかに渦をまいたポケモンが現れた。その体は小さく、女の子の腰ほどの身長しかない。にこかわらず、自信たっぷりの表情でニドリーノと対峙している。

「ニョロ！」

男の子が言った。ニョロとはこのポケモンの名前らしい。

「『あわ』で先制こうげきだ」

ニョロはうずの中心からあわを出し、それに体当たりする。あわはみるみるとんでいき、ニドリーノにぶつかり、はじけた。ニドリーノは「ニョロ、ロケットずつき！」という声にきづかず、ビックリしている。気をとりなおしてニョロの姿をさがすも、どこにもいない。きよろきよろしているうちに、アゴに衝撃を感じた。目から星がでたかとおもったところで、ニドリーノは気を失った。

「いづくぞ！」

空のモンスターボールをつかむと、ニドリーノめがけて投げる。ボールが命中したとたん、ポンツと煙が広がる。ゴンゴンと言う音

がしばらくつづき、やがて止まった。煙が消えたあとには、モンスターボールにおさまった、ニドリーノの姿があった。

「やったぜ！」

パチンっと、指をならす。ニドリーノをおさめたモンスターボールを拾うと、ニョロをボールにもどし、ベルトのホックにかけた。

「ポケモンをゲットするなら、もっと弱らせてからでなきゃ」

「すごい！」

この少年はレッドという、マサラタウンで一番腕の立つトレーナーだ。やや自信過剰なところがあるものの、知恵と勇気、それに優しさにすぐれ、なによりポケモンへの情熱にあふれた、熱血少年だった。

「ほら、これ」

ゲットしたばかりのニドリーノを渡す。

「え？ いいの？」

「いいってことよ。まだポケモンをもっていないんだろ？ さいしょのポケモンって、だれかからもらうもんだしな」

「だけど、そんな、わるいわ……」

「気にすんなって。オレのニョロだって、父さんからもらったんだ。キミもはやくトレーナーになって、しょうぶしようぜ」

「わかった。ありがとう」

モンスターボールを受け取ると、なかをのぞいた。ボール越しにキスすると、ニドリーノはうれしそうに鳴き声をあげた。

「わたし、この子と世界中を旅したいなあ。ねえ、あなたは旅に出ないの？」

「オレは父さんを待つてるんだ」

「父さん？」

「うん。幻のポケモンっていうやつを探して、遠くへ出かけているんだ。手がかりが見つかったから、そろそろ帰るはずなんだけど、なかなか帰らなくて」

困ったような顔で、ほほをポリポリ掻いた。

「ふーん。だったら、あなたがつかまえちゃえば？　その、幻のポケモン、っていう子を」

「オレが？」

「そうよ。……そういえば、オーキド博士って知ってる？　ポケモンにすごく詳しいんだって。あの人なら、なにか教えてくれるはずよ」

「オーキド博士？　あのへんくつじいさんか？」

「そんなこと言わないでよ。いい人なんだよ。それに、わたし聞いたの。博士には孫がいて、この前まで留学先から帰ってきたんだって。すごく強いトレーナーらしいの。きつと、なにか知ってるわよ」

「へえ。まあ、考えておくよ。それじゃあ、また明日な」

手を振ってあいさつすると、家へと歩き出す。すでに夕日が傾き、そらは赤くなっていた。何気なく振り向いて、女の子を見ると、ニドリーノをゲットしておおはしゃぎだった。よほどニドリーノがすきなのだろう。もしかしたら、すごく強いトレーナーになるかもしれない。

レッドの頭に、ふと、女の子の言葉が浮かんた。

「すごく強いトレーナー、か」

留学から帰ったトレーナーだろうと、どんなトレーナーだろうと、自分のほうが強い。そうに決まっている。気分を奮い立たせていると、誰かとぶつかった。

「わっ！」

「いて！」

相手は黒づくめの男だった。黒いベレー帽に黒の作業服を着て、足にはとがった革靴をはいている。胸に「R」という赤い刺繍がぬつてあり、その風貌はまさに、「悪人」そのものであった。

「気をつける！　小僧！」

レッドがぶつかった相手のほかに、黒づくめの男は、四人ほどいた。一様にレッドをにらみつけると、どこへともなく歩いていった。「あんなやつら、この町にいたかな？」

立ち去るうしろ姿の中に、レッドの目を引くものがあつた。モンスターボールだ。

「あ！ あいつら、ポケモントレーナーだな」

草むらに飛び込むと、背を低くする。この少年、なんと尾行しようというのだ。男たちをおいかけて、森の入り口で立ち止まったのを見ると、身を隠して耳をそばだてる。いわゆる、盗み聞きである。「とにかく、このあたりに逃げ込んだことは間違いない！ なんとかしてもさがしだすのだ！ 幻のポケモンを！」

男の一人が言った。幻のポケモンとは何のことだろう？

「まだ探していない場所は西の森か！ 今夜はそこを徹底調査だ！ いくぞ！」

合図とともに走り出し、森の奥へ消えていった。レッドはポツンと、とり残されるかたちとなった。

「……いいこときいちゃった」

しめしめと、うすら笑みをうかべる。よからぬことを思いついたようだ。

「その幻のポケモンとやら、このレッドさまがイタダイちゃうもんね」

この少年、かなりの無鉄砲のようだ。

2・ショッキングなできごと

夕日が姿を地に隠し、空が紫色に染まるころ、レッドは西の森にやってきた。足がよろめくほどの大量のモンスターボールをかかえつつ、にやにやと森中を歩く。ボトボト落っこちるボールにかまわず、イッヒツヒと不気味な笑いを立てている。正直言って、コントのように見える。

「しめしめ、あいつら、まだきてないぞ。さーて、幻のポケモンちゃんはどこかな？」

西の森は高い木がそびえる。この時間でもすでに、夜のように暗い。

「ライトでも持ってきてくりやよかったかなあ？ でもそれじゃ、あいつらに見つかるだろうし。うゝん。……ん？」

正面に人影を発見した。黒づくめの連中かと思ったが、どうやらちがう。とがった逆立ちの髪に、長袖、長ズボン、そして長靴をはいており、首からパソコンのマウスみたいなペンダントを下げている。その目は鋭さと冷ややかさを具えており、レッドは自分とは反対のものを感じ取った。

少年の視線の先にあるものに、レッドは釘付けになった。

「あれは……？」

光るポケモンが宙に浮かんでいる。そのポケモンは宇宙人のような顔をしており、からだから長いしっぽが生えている。けれど不気味さはない。むしろ、愛らしいさがあるほどだ。特に、その青い目は、果てしなく澄んでいて、心が洗われるようにきれいだった。このポケモンは、いったいなんなんだろう？

「行け！ ヒトカゲ！」

少年が言った。なげたモンスターボールからポケモンが現れる。オレンジ色のトカゲのような姿をしており、しっぽに炎が灯った、瞳の大きなポケモンだ。

「あいつ、ポケモントレーナーか！」

おどろくレッドにかまわず、ヒトカゲは『光りポケモン』に飛びかかる。口から火炎を放射して、距離をつめる。光りポケモンに当たりそうになったとき、どこからともなく電撃が飛び、火炎をはじいた。

「かまうな、つづける」

少年が言った。ヒトカゲはうなづき、再び火を吹く。さつきよりも、ずっと勢いのある炎だった。ところが、またしても電撃が火をはじいた。

レッドは戦いの様子を、影から見ていた。

「すげえ……。こんな戦い、見たことないぜ」

自ずとヒートアップし、気づけば自然と立っていた。拳をにぎり、ヒトカゲを応援しつつ、戦いの行方を見守った。

「もついい！ 戻れヒトカゲ」少年が言った。

「え……!?」

ヒトカゲはモンスターボールに戻ると、少年の手へと飛んでいく。少年がボールをキャッチしたのと同時に、レッドが言った。

「ナニやってんだ！ チャンスじゃねーか！」

草むらから飛び出した。少年はこちらに気づき、視線を向ける。

しかし、その目は冷ややかだった。まるで、あきれはてたような目だ。

「くっ！」

モンスターボールを取り、ニョロを出現させる。

「ええい！ 行けっ！ ニョロ！」

なぜ少年が勝負をなげたのが、わからない。勝てそうだったのに、なんでやめてしまうのか。ニョロに指示を出す。

「『みずでっぽう』だ！」

指示通り、ニョロはみずでっぽうの体勢に入る。手からみずでっぽうを噴射した、そのとき、衝撃音がした。見れば、ニョロが倒れている。

「ニョロ!?」

氣をとられたスキに、光りポケモンはすごいはやさで、レッドをかすめるように飛び去った。レッドはびっくりして「うわ！」と言い、目をつむる。はつと目を開けたとき、そこには誰もいなかった。

「ニョロ！ おい、しっかりしろ！」

「おい……おまえ！」

少年が言った。

「オレとあいつの戦いを見ていて、何も感じなかったのか？」

何も感じなかったか、とは、どういう意味だろうか。すぐには分からなかった。しかし、倒れたニョロを見ると、冷たいものが胸を

よぎった。

「オレは二回の攻撃でレベルの差を見切った。だから手を引いたんだ。自分の実力以上に思い上がるヤツは自滅する。フッフ……覚えておいた方がいいぜ」

後ろを向いて去っていく。少年の捨てセリフに、レッドは何も言えなかった。手を突き、うつむき、ニョ口をながめたまま、時間だけが過ぎていった。

風が冷たくなったところ、黒づくめの男たちが、レッドを見つけた。一面の焼け野原にとまどいつつ、先頭の一人が、レッドに声をかけた。

「オイ！ 小僧！」

この男は他の黒づくめの男たちとちがい、悪人には見えない顔をしていた。心配そうな顔でレッドを見ている。彼にはこの少年が、ヤケをおこして暴れたように見えたのだろう。

「なんてことしやるんだ！」

「放っておけ！ サイカ！ それよりもミュウだ！ まだ近くにいるかもしれない」

「了解！」

サイカと呼ばれた男が走り去ると、レッドはポツンと、とり残されるかたちとなった。とはいえ、黒づくめの男たちの話を盗み聞きしたときと違い、レッドの心は塞ぎこんでいた。

「オ…… オレが負けた……？」

3．強くなりたい！

マサラタウンの東には、オツキミヤマという、小高い山が見える。朝日がオツキミヤマ越しに、マサラタウンを照らすと、今日も一日が始まる。

レッドにとって、この日の太陽は一日の始まりというだけでなく、

一大決心の始まりを意味していた。

「ここがオーキド博士の研究所か」

レッドの正面に『オーキド博士ポケモン研究所』という、金板の看板が立っている。それを通り過ぎて玄関に立つ。

「へんくつでガンコなじじいときいてたから、今までちかづかなかつたけど……」

インターホンに手をのばす。ためらいがあるのか、一度手を引いた。このまま帰ってしまおうか？ しかし、モンスターボールの中で目を回すニョロをみて、決心がついた。

「くやしいけど、オレが今よりも強くなる方法がわかるのは、ココだけみたいだ」

ふるえる手にかまわず、インターホンを押す。鳥のさえずりのなか、ピンポンという音が、マサラタウンに響いた。

第一話 vs ミュウ（後書き）

マンガを文章に起こしていると、キャラの心情に接することができた感じがして、すごく楽しかったです。マイペースに更新していきたいと思います。

第2話 vs ゴーリキー（前書き）

大変お待たせいたしました。第二話、vs ゴーリキーです。ピカチュウはまだ登場しませんが、お楽しみいただけるように、頑張っ
て書きました。

第2話 vs ゴーリキー

1 .

一大決心を胸に抱き、夜明けと同時に、オーキド博士の研究所を訪れた。そこまではよかった。

ピンポン、ピンポン、ピンポンと、朝日にチャイムは鳴るばかり。だれも中から出てこない。

「だれもいないのかな？」

しかし、ドアノブは回せる。カギはかかっているらしい。

「入ってみるか。おい、オーキド博士えー」

ギギという、ちょうつがいのかしむ音とともに、本のおいが鼻をつく。部屋は広く、本棚や機械がならんでいる。

レッドにとっては本よりも、その奥にある、モンスターボールの方に目がいった。エアダクトのついたプラスチックの棚に、ボールが整然と並んでいる。ポケモン博士だけあって、ボールは丁寧にあつかうのだろう。

きよろ、きよろ、と部屋を見渡す。誰もいないことを確かめると、奥を指してのし歩く。その途中、棚と別においてある、モンスターボールを見つけた。机の上においてあり、小さい名札が貼っている。手に取ると、「フシギダネ」と書いてあった。

「フシギ……ダネ。アハハ、背中にタネがあるのか！　へーっ！」
フシギダネは四角い顔に、三角の目と耳、背中につぼみ状の花がある、緑のポケモンだった。一見して怪獣みたいな顔だが、よくみるとかわいい。四足歩行のポケモンを持たないレッドにとって、なにかも新鮮だった。

「ホラ、見てみるよ、ニョロ！」

腰からボールを取って、フシギダネと対面させる。自分のポケモ

ンじゃないけれど、それでも仲良くなってみたい。

ところが、ニヨ口を見たたん、フシギダネは騒ぎだした。ガタガタ震え、フーツと息をはく。

「お、おいおい、どうしたんだよ？」

人のポケモンだからなつかないのか？ それにしても、尋常でない騒ぎようだ。

どうしてなのか考えていると、後ろかのドアが開いた。

「へ？」

振り返ると、白衣を着たおじいさんが仁王立ちしている。レッドから冷や汗が流れた。

「こんの！ ドロボーめ！」

「うひゃあ！」

いきなり怒られた。険しい顔で、ドカドカ近づいてくる。すごい迫力だ。

「あ、あの……。いや、オ、オレは……」

強くなる方法を教えてもらいたいんです。そう言おうとしたとき、バランスを崩した。よろめいていると、ヒジになにか当たった。カチツという音もした。

「ああ！ それは！」

オーキド博士が言った。今度はプシューと音がする。部屋中のモンスターボールが、一斉に開いてしまったのだ。ここぞとばかりにポケモンは、ばばばば、と飛び出した。

「この悪がき！ なんてことするんじゃない！」

「そ、そんな。ワザとじゃ……」

しまった。なんてことをしてしまったのか。なんとか弁解しないといけない。オーキド博士の顔は、ますます険しくなっていく。と、そこへ、何か臭うものが落ちた。逃げ出したポツポのフンだ。

「あ……」

「……」

オーキドが震えている。怒りの火山が噴火するところなのだろう。

「とにかく、つかまえるー！」
「ハイ！」

2 .

逃げたポケモンをつかまえるのは、想像以上に大変だった。なにせ研究所には、百匹近くのモンスターボールがあったのだ。

棚のボールを掴んでは投げ、つかんでは投げ、ひたすらそれを繰り返す。

本棚にかくれたポケモンは、レッドがつかまえて、オーキド博士がボールを投げる。空を飛んだポケモンは、ニョロが取り押さえ、そのままレッドが捕獲する。まるでポケモンゲットのマラソンだ。そのうち肩が重くなり、汗までふきだした。

格闘すること数十分、やっと全部つかまえた。と、思いきや、窓が割れている。何匹か外へ逃げたのだ。

「オ、オレ探してきます」

「ハア、ハア、待てい！ 逃げようとしても、そうは行かんぞコソドロめ！」

「ち、ちがう……！ 勝手に部屋に入っちゃったことと、ポケモンを逃がしちゃったことはあやまるよ」

「なんじゃその言葉遣いは！？」

「い、いえ、その…… あやまります！ でも、ポケモンを探さないと」

「うまいこと言って逃げ出すつもりか？」

「そんなことはありません。オレ、強くなりたくて、その方法を教えてもらいたくて、博士をたずねたんです。絶対に、逃げ出したりしません。ドロボーでもありません」

「うーむ……。…… よろしい。まずはポケモンをすべてつかまえてから考える。ワシもついていくぞ。外に出たら、わしもおらんとわ

からないじゃろうからな」

「ありがとうございます！」

部屋を出て、倉庫に入る。コンクリートの壁に、オーキド博士のマウンテンバイクが立てかけてあった。オーキド博士がまたがってレッドは外へ走り出す。なんだ、意外ともものわがりのいいじいさんだな。そう思った矢先だった。

「ただし、ポケモンをつかまえ終わったら、なんにせよ警察へつれていくぞ。よいか!？」

「あちゃ……」

すこし気が滅入るレッドだった。

3 .

逃げたポケモンを追いかけて、レッドとオーキドは、マサラタウンを駆けていく。さすがオーキド博士、居場所をピタリピタリと的中させ、ポケモンをつかまえていく。ゲットの腕は一流だ。

ところがマサラタウンを回っても、全部はいまだつかまらない。そこで、となり町の「トキワシティ」へ行くことにした。道中の草むらにも、やはり、逃げたポケモンたちはいた。

トキワシティに着いたとき、ニヤースをみつけた。ボールを当て、ゲットに成功した。あとはフシギダネを残すだけだ。

「しかし、トキワシティまでできてしまうとは……。老体にはこたえるわい」

「あとはフシギダネだけですよね」

レッドから自然と敬語がでた。悪戦苦闘をくり返すなか、レッドは自然と、博士の腕前を見たのだ。このおじいさん、すごい人かもしれない。

空に夕日がかがやいて、町は紅く光りだす。夕飯をつくる、おいしそうなにおいもしてきた。フシギダネもしかすると、おいに

つられるかもしれない。目を凝らしていると、フシギダネを発見した。

予想通りの光景である。ブロック塀によじのぼり、花模様のガラス越し、家の中を、よだれをたらして見つめてる。視線の先には、おじさんが鍋のおたまを回していた。このにおいは、シチューだろう。

「（そういや、父さんも得意だったっけ。シチュー。トレーナーとして旅に出る時に、キャンプ料理をおそわったっけなあ……）」

「む！ あれはフシギダネ！ レッド、なにをばやばやしておるか行くぞ！」

「へ？ あ、ハイ！」

フシギダネも気づいたのか、塀を降りて逃げ出した。住宅街を横切って、商店街をつつ走る。人ごみを器用によけるさまは、とても人間にはまねできない。

「博士、あいつ、すばしっこいですね」

「草ポケモンはスピードに優れる。ほれ、いそぐぞ」

商店街を抜けた先、人気のない、大きな建物があった。ペンキ塗りの頑丈な、普通の家二つ分の高さだ。大きな文字で「TOKIWA CITY GYM」と書いてある。フシギダネはここへ逃げ込んだ。

「あの建物に入ったぞ！」

フシギダネを追いかけて、鉄扉を開ける。長い間使っていなかったのか、ギイという鈍い音がした。中はタイル張りの、大きな空間だ。ところどころクモの巣が張っており、人の気配はまるでない。体育館とおなじ、汗のにおいと、靴底がこすれるにおいのほかは、なにもなかった。

「おい、フシギダネー！」

レッドが言った。暗い中を進んでいくと、人が立っていた。

「うお！」

「どうした、レッド」

「ひ、人が……」

「よくみよ、レッド。銅像じゃ」

それは体格のいい男の像だった。スーツを着込み、目を三角にとがらせ、後ろに手を組んで、笑みを浮かべている。銅像の下には、「トキワシテイジムリーダー、サカキ」という刻み文字があった。

「（うげ、ジムリーダーってのは、人相がわるんだなあ……）」

そのまましばらく見入っていた。胸騒ぎがする。なにか、得体の知れなさ、この男には漂っている。

「なんたるな、この感じ。……わかった、エムっばげだ！」

レッドが言った。

「つるっばげなのはつきりしないから、もやもやするんだ。そうか、なるほど」

「レッド、そこで何をしておる。フシギダネがおったぞ」

オーキドが言った。見れば、フシギダネが壁にくっついて休んでいる。

「さ、おとなしくこっちへ来い」

にこやかに近づくオーキドに、フシギダネの体当たりが命中した。

「ぐほっ！……こんの！ 飼い主にむかって！」

「まっってください、博士！ フシギダネ、こわがらなくていいぜ」

フシギダネの様子を見ると、キツとこちらをにらみつけ、いつでも来い、と身構えている。

「こわいんだよな……そうだよな……。外にでるのはじめてだもんな」

レッドが言った。オーキドはレッドを、感心しつつ見守っていた。「研究所で見たとき、他のポケモンとは別にしてあったよな……。自分以外の生き物を見るの、はじめてだったんだろう？」

すると、フシギダネの表情が変わった。角がとれ、もとのやさしい顔にもどっていた。安心したのか、レッドにほほをすりすりと擦りつける。

「よしよし、おなかへってんのか？」

これで最後の一匹だ。後は、オーキド博士と警察へ行くだけだ。ちゃんと事情を話せば、わかってくれるかな？

話の筋立てを考えていた時だった。背後からメリメリと、なにかが潰れる音がした。振り向くとそこには、巨体のポケモンがいた。筋肉隆々の体格で、マッスルポーズを決めている。口を大きく開き、怒ったような目つきを、こちらへ向けていた。これは、まずい。

「げっ！ やせいポケモン！？」

「格闘ポケモン、ゴリキーじゃ！」

凶暴なポケモンに出会うほど、この世界で危ないことはない。ポケモンなしで外に出て、もしも彼らに出会ったら、何をされるかわからない。凶暴な野生ポケモンは、熊やトラより危険なのだ。

ゴリキーはいきなり、こちらに「メガトンパンチ」を繰り出した。こんなものをくらったら、顔がつぶれて死んでしまう。腰がぬけてへたり込んだ時、ゴリキーの腕がとまった。フシギダネが「ツルのムチ」で、ゴリキーのメガトンをとめたのだ。

「ス、スゲエ！ は、博士！ このフシギダネの覚えている技は！？」

オーキド博士の返事がない。泡をふいて倒れている。フシギダネのツルのムチも、ゴリキーにちぎられた。ターゲットは、レッドである。

「うわちゃー、どうすっかな？ フシギダネ、こっちへこい！」

「ダネ、ダネ！」

レッドのもとへ走りよる。走りよったは良いものの、指示がない。不安げな顔で、レッドを見つめる。

「ダネ」

「ま、まってくれよ。いま指示するから。タネ……フシギダネ……」
ゴリキーはその間も、にじりよってくる。なす術もないまま、レッドたちは、壁に追い込まれてしまった。

「くそっ！ 何か方法は……」

そのとき、あることに気づいた。暗いはずの部屋で、やけにゴ-

リキーが見える。気のせいかな、体全体が赤っぽい。

「そうか、もしかしたら……！」

後ろには古びた黒幕があった。破れた隙間から、夕日が差し込んでいる。思ってたとおりだ。

「ええい！」

一息に黒幕を空けた。たちまち夕日が差し込んで、部屋全体を照らし出す。フシギダネの体から、淡い光りがにじみでた。その光りはタネの先端に集約し、強く鋭い光となる。ゴリキーが突進をしかけると、タネから光線が飛び出した。強烈な光線はゴリキーを打ち倒し、ズウウンという轟音のあと、部屋は静かになった。

「うつむ……」

「博士、大丈夫ですか？」

「ああ、わしゃ平気じゃ。それよりも、ソーラービーム、知るつつたのか？」

「うつん。でも、背中に植物しょってるから、太陽がすきなんじゃないかと思って」

「たいしたもんじゃ。ウハハハハ！ よし、そのフシギダネはキミにやろう」

「ほ、本当に？ や、やった！」

「それと、レッド」

オーキド博士が言った。表情は真剣だ。やはり警察につれて行く気だろうか。

「は、はい……」

「強くなる方法を聞きたいそうじゃな」

「そ、そうです。オレ、強いポケモントレーナーになる方法が知りたくて……」

「そうか。なら、強いとはどういうことだと思うかね？」

「……え？」

「技がたくさんあることじゃろうか？ レベルが高いことじゃろうか？」

「それは……」

「どう思う？」

「やっぱり、技がたくさんあって、レベルが高いことの、両方があることだと思います」

「そうではない。大切なのは心なのじゃ。キミが先ほど、ポケモンと通わせた心……。その心こそが、誰にも負けないポケモントレーナーとなるための道になるのじゃ」

懐から赤い箱を取り出した。B5の手帳ほどの大きさで、緑と黄色のランプがついている。

「これは？」

「これは『ポケモン図鑑』じゃ。受け取りなさい。君がポケモンと出会うごとに、そのデータを記録していける」

「いいんですか？」

「もちろんじゃ。その図鑑に全てのデータを記録するところには、レッド、お前は究極のポケモントレーナーになつとることじゃろう」

「オレが……」

全てのデータを記録するとき、ということとは、父が探している、幻のポケモンも探すということだ。もう、迷っている時間はない。

父を待たずして、旅立つ時が来たのだ。強くなる道が、開いたのだ。

「（父さん。オレ、父さんが帰ってくるときには、強くなつてみせる。その時は、オレも冒険に連れてつてよね）」

ポケモン図鑑を握る手が、自然と熱くなる。

「（絶対になつてやる、究極のポケモントレーナーに！）」

第2話 VSゴリキー（後書き）

ポケモン図鑑ゲット！ マンガを見直してみると、レッドって頭
良いんですね。意外（おい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0167p/>

ポケットモンスターSPECIAL

2011年1月14日18時40分発行